

第4編 座談会／古老の語る「坂田風土記」



〈出席者〉

- 秋元忠治 (明治34年4月22日生まれ)
秋元 聰 (明治41年7月16日生まれ)
安藤喜一郎 (明治35年12月14日生まれ)
磯貝久太郎 (明治22年5月9日生まれ)
色部金治 (大正7年2月16日生まれ)
小野近之助 (明治30年8月5日生まれ)
坂井武次 (明治37年1月11日生まれ)
諏訪祐慶 (明治31年3月4日生まれ)
平野秋蔵 (明治34年11月24日生まれ)
広部徳蔵 (明治23年11月7日生まれ)
広瀬 潔 (明治39年9月18日生まれ)
伏居岩吉 (明治30年9月26日生まれ)
牧野小一郎 (大正9年4月23日生まれ)

ほか編集委員一同

〈司会〉編集委員 坂井清治

昭和55年2月3日 ホテル千成にて

研究熱心な先駆者たち

司会 本日は坂田の長老といわれる方々にご出席いただきまして本当にありがとうございます。

改めて申すまでもなく、坂田は非常に大きく変貌してきました。この十数年をみても、漁業権の放棄、新日本製鉄の進出、さらに土地区画整理事業と進んできたわけですが、それでは昔はどうであったのかとなれば、どうしても長老の方々のご協力を得なければ、何かと解明できません。その意味で本日はお忙しい中をご参集願ったわけですが、知り得るかぎりのご記憶を披瀝していただければ幸甚に存じます。

それでは、口火を切る意味で最長老の磯貝さんからひとつ昔のことをお聞きしたいと思います。磯貝さんは明治二十二年五月九日生まれということですが、兵隊には現役でいかれたのですか。

磯貝久太郎（家号「紋兵衛」） そうです。明治四十二年十二月一日に市川の国府台にあった野砲兵第十五聯隊に入りました。そこに三年いて、除隊は大正元年十一月二十八日だと記憶しています。

司会 兵隊の手当というのは、どのくらいのものでしたのですか。

磯貝 入営当時は一〇日目ごとの支給で、たぶん三二〜三三銭でした。その後、上等兵になって五〇銭。大正元年といえば白米一俵が七円ぐらいでした。帰ってきてからはずっと百姓をやってきたというわけです。

司会 お米の話が出たところで、坂田の農業あたりから話をすすめていきたいと思いま



磯貝久太郎

す。そのころの米の反収というのはどのくらいだったのですか。

坂井武次（家号「武兵衛」） 私の家が小作をしていた頃は反六俵ぐらいがいいところだった。

広部徳蔵（家号「瀧えむ」） 小作していて年貢で三俵取られると、残りが一俵ぐらいだったからね。四〜五俵じゃないかな、普通は……。それから化学肥料を使ったね。

司会 それはいつごろのことですか。

伏居岩吉（家号「藤井」） 大正のはじめごろだよ。

磯貝 そうだろうね。私が兵隊から帰ったときには、久保の金田肥料店で化学肥料を扱っていたからね。

広部 化学肥料は、地主は買えたが、小作している者はとても買えなかった。そういう時代があったね。

司会 そのころの漁業はどうだったのですか。

磯貝 海苔を始める前は手操りで魚を採っていた。

広部 坂田で海苔をやっていた人は、その時分何人もいなかった。それで、浜辺は大堀や青木の人に貸していた。私が海苔をはじめたのは二十四歳のとき。ちょうど女房ももらった年だからよく覚えていた。私は明治二十三年生まれだから、やはり大正一、二年のころということになる。それから、みんながおいおいに海苔をやるようになった。

それからしばらくして海苔網でとることが始まったんだ。網でとるようになったのは、日本で坂田が一番早いよ。

司会 網というのはコイルヤーンですね。それはいつごろですか。

広部 坂井のおじいさん（十五代四郎治）が組合長をやっていたときだから、大正五〜六年ごろですね。そのとき、大堀の津川清治さんという人が君津郡の水産会の技師をやっていた。それで、そのコイルヤーンの網を使って試験してくれといったのです。しかし、よその組合はみんな使わないんだ。それを坂田だけが海へ張った。

はじめはあんなものでとれるものではないと思っていたが、試しに張ってみたら案外とれた。それから坂田の漁業組合は研究部をこしらえることになって、平野仁三郎さんと秋元糸吉さんと私の三人が入った。それであくる年に希望者を募ったところ、四二枚かな、希望者があった。

広瀬 潔（家号「庄ざえむ」）あのととき、私は二枚買った。しかし、網の目が大きかったので、こんなものでとれるかといって、長持へしまっちゃった。

広部 そこで私どもが研究したことは、どこに一番付着層が多いかということだった。私はこう考えたんだ。この試験のためにいちいち網を張るといっても大変だから、糸でやったらいいだろうということ、糸を杭と杭との間に二段に張って、毎日、一本ずつ糸を張り替えていった。それを一カ月やったら、付着層が出たわけです。

司会 なかなか辛抱のいる研究でしたね。

広部 ええ。その研究のときに、波打ち際からどこまで付着層があるかも調べたのです。それで、一番多いのはどこかという、小潮の満潮面から一尺五寸（四五センチ）のところ、そこが一つの標準だということがわかった。それから網を張るのはピンと張らずに、しかもこすらないように張るといったこともわかった。

司会 広部さんがお幾つぐらいの時だったのですか。



広部 徳蔵

広部 三〇は越えていたでしょう。関東大震災よりは前だったと思うが……。

それで、平野仁三郎さんなんか、先生先生と呼ばれて、近隣の漁協に指導に出かけたものですよ。金田とか奈良輪あたりへね。私はいつもお伴でついていったものだ。だから、網を使った海苔養殖は坂田が一番早かったし、ここから方々へ広がっていったんですよ。

参勤交代にも使われた畑沢道

司会 ところで、そのころの道路はどうだったのですか。私たちが知っている道路というのは、山の根方の一本道、それから花の井から海岸までの一本道、それから現在の秋元聰さん宅の下から南の山に通じる寺家坂の山道。文政のころの絵図面を見ますと、海岸道路、いまの一六号国道はないのですね。あそこに道らしいものができたのはいつごろだったのでしょうかね。

坂井 私らが子供の時分には、あそこを新道といったんです。多分、明治以降だったんじゃないかな。

小野近之助 (家号「小野」) 道路はなくて、波打ち際を歩いたものだったね。

諏訪祐慶 (長福寺住職) 磯貝さんの家のあたりから納戸根なんどねへかけて、あの上に鳶ヶ作というところがありますが、そこから下に降りてくる道があったのではないですか。馬が降りてこられるような……。

磯貝 リヤカーが通れるぐらいの道はありましたが……。

諏訪 私が昔、波岡の小学校に勤めていた時分に、底の丸い壺(須恵器)があって、それ



諏訪祐慶(長福寺住職)

が鳶ヶ作から出たと記されてあった。それでちょっと調べてみたのですが、あそこは昔は馬込だったようなのです。馬込というのは、戦国時代のころの馬の飼育場のことで、馬をたくさん飼っていた。宇治川の戦いで、佐々木高綱と梶原景季が嵐の日に宇治川を競争して渡ったことがあったが、そのとき佐々木高綱が乗った馬が、この馬込から出たという説もある。だから、このへんは、昔は馬をたくさん飼っていたんです。

司会 磯貝さん。昔、おたくのわきから畑沢に通ずる山道がありましたね。あれは昔、物売りが木更津に往復したり、何かのときは小さな店が出たこともあるという話を聞いたことがありますか……。

磯貝 店が出たかどうかは記憶にありません。江戸から桜井の港に着いた行商が、その道を通って佐貫のほうへ行ったことは確かです。天びん棒をかついだ行商人がよく通りました。

それから、日露戦争のときは凱旋道路にもなったんです。畑沢の浅間様の下にレンガのアーチをこしらえて……。

司会 そうすると、そのころは木更津へ行ったり、佐貫へ行ったりするには、畑沢道が主な交通路だったんですか。

坂井 そうです。あの道はその昔、参勤交代にも使われていたそうです。下にー下にーとあそこを通っていったそうです。

司会 それから、花の井から本名輪海岸に通じる道の、いまの大関谷に分かれるところから少し西あたりは急な坂になっていて、荷車や馬車にとっては難所だったですね。そして、道路の南側は松山があり、その下の田圃はほたるの名所だった。昭和十七、八年

■宇治川の戦

一一八四年（寿永三年・元暦元年）一月、源義仲と西上してきた源義経との間で、宇治川をはさんで行なわれた戦い。源義経が勝利を収め、義仲は近江粟津で討死。

■佐々木高綱（一一四二―一二〇五）

鎌倉初期の武将。平治の乱後、父秀義とともに相模渋谷谷荘にのがれ、一一八〇年（治承四年）、源頼朝挙兵とともにこれに従って各地を転戦、宇治川の戦いでは先陣の功をたてた。長門、備前などの守護職を与えられたが、一一九五年（建久六年）、家督を子重綱に譲り高野山に入山、西入と号す。

■梶原景季（一一六二―一二〇〇）

鎌倉時代の武将。父景時とともに源頼朝に従い、源義仲の追討、平氏追討で武功をたてた。一一九九年、父が結城朝光をおとし入れようとしたことから、三浦義村らと対立、鎌倉を追放され、翌年、上洛の途次駿河狐崎で戦死。

のところに平らになりましたが……。

広部 そうだね。花の井へ曲がるところには小さな堰があって、そこに大きな松が何本かあった。それが落雷にあって裂け、ぶっ倒れたね。

水利事業で畑を水田に

司会 今度は田んぼの話ですが、私が子供のころは畑がずいぶんありましたね。田のほ
うが得だということで、みんなつぶして水田にしたわけですが……。

磯貝 畑が多かったね。うちの前の一の壺あたりはみんな畑だった。

坂井 いまの君津駅のところなんかも、みな畑だった。

広部 坂井清治さんのそばにある私の田んぼも、昔は畑だった。その後、久保水利の水
が通ったので田んぼになったのですよ。

平野秋蔵（家号「吉兵衛」） 久保に水車ができてから田んぼがふえましたね。堰の水の
かかりやすいところでは苗代がさかんに作られた。水がむだになるといって、水引き当
番といったものがありましたね。

司会 大堀がなくなったのは、区画整理になってからでしょう。古い区画をみますと、
大堀の一带は昔から雨が降ると水が満々として、田の畔も何もわからない。壊れちゃっ
たような場所だったと書かれている。

広部 そう。大堀が変わったのは、土地改良のときじゃないかな。区画整理に入る前は
あったから。

あそこに一の沖田、二の沖田、三の沖田とあったでしょう。あれは水利組合には入ら



花の井の松の木(昭和9年10月)

ないんだ。だから堰には関係しない。それで、あの堀の水を汲み上げたんだ。

伏居 昔はよく水を汲んだね。

広瀬 私なんかよく汲んだ。

広部 旱天ひびのときなど大龍から水をもらうときに、あの堀を利用したんだ。

司会 広部さん。昔、苗代を作って苗を育てた時代に、あなたが水引きの先達だという話があるんですが……。それは、何歳ぐらいのときですか。

広部 三〇を越えていたかな。

司会 当時の堰水というのは、坂田のどのへんまで引けたんですか。

広部 水路をこしらえるときには、原の下まで堰の水を落とすつもりだった。しかも、久保から引いてくる水路の勾配をとらずにやらなければいけない。それで、堰水を原の下に落とせるように、平らにこしらえたんです。

司会 大正中期ごろ、苗代の虫とりを子供たちがやらされ、石油をまいて棒で虫を払い落とし、空缶に入れて学校に持参すると、五銭か一〇銭で買い上げてくれた時代がありましたね。

平野秋蔵 蛾をとりましたね。子供たちに取ってもらって大分助かりました。

司会 苗代の水引きも当番があったのではないですか。

平野 ええ、当番制にして水がむだにならないようにしました。志毛と原と二区切りになっていました。

司会 堰の土手の改修工事を行ったとき、鰻止めというんですか、下のほうに黒土を大分使ったという話ですが……。



平野秋蔵

広部 私が聞いた話では、あの堤防は、沖田あたりの粘土を馬で運んできて、千本突きをやって基礎を作ったということだ。それを私らが、改修するとき、堤防をまっすぐにするので切ったでしょう。そのとき、その土が出てきたわけだ。県から来た技師も、よくもこういうものをこしらえたもんだと感心していましたよ。

司会 広部さんたちがやったというのは、昭和三年の改修工事でしょう。

広部 そうそう。その時の工事は、県から技師が来て、基礎を五寸にして、千本突きをやれということだった。ところが、工事を請け負った富津の業者は、五寸のところを一尺にしてしまった。それが県の技師にわかって、これはなんだ、こんなに手抜きしてと、工事のやり直しを命じた。それで富津の業者が頭にきて、酒を飲んできて、大暴れしたということがあった。

「仲町がや」と海の簀立て

司会 それから広部さん。これはお宅のご商売にもなるのですが、坂田のかやは有名でしたね。

磯貝 いいかやだったよ。一般には「仲町がや」と呼ばれていた。

広部 坂田のかやは「仲町がや」が代表名で、「谷」「加ざえむ」「弥えむ」の山にもいいものがあつた。仲町が二〇〇反^{だん}、加左エ門と谷が一五〇反^{だん}ぐらいだったかな。なかでも仲町がやは質がよくて、屋根をきれいに葺く人はみんな仲町、仲町といったものでした。

司会 当時、専門の屋根屋さんは何人ぐらいいましたか。

広部 大勢いましたね。百姓や浜の仕事の間の稼ぎとしてやりましたからね。治えむ(秋

■一反(だん)は三〇把。一把は径二五センチぐらい。

元晋家)、たいなつ(中野浦吉家)、九兵衛(秋元忠治家)、あやめ(安藤万次家)、八兵衛(井祐稔家)、作えむ(秋元聰家)、喜三郎(広部毅久男家)、宇兵衛(斉藤誠一家)などもやってた。

広瀬 私もやりました。治郎兵衛(坂井清治家)のおじいさん(治助)もやったし、その弟の新治さんもやった。

広部 その時は農閑期にやったので、同じ仲間がみんなやったんです。海苔をやるようになって、そっちが忙しくなってから、かやがバカバカしくなって、やる人が少なくなっただ。収入がちがうからね。

司会 小野さんは明治三十年八月五日生まれということですが、兵隊はどちらに行かれたんですか。

小野 札幌の歩兵聯隊に入隊しました。大正六年十一月に行つて、その翌年の七年、八年と満州で教育を受けました。

司会 シベリアに行かれたそうですね。

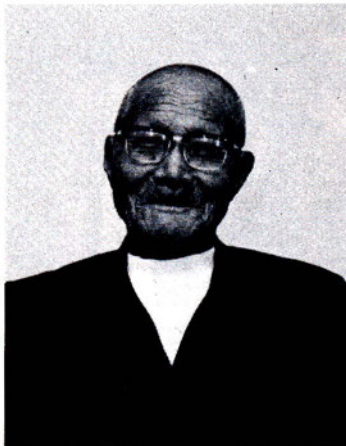
小野 ええ、そうです。あの時はロシアがガタガタしていて、日本軍に動員命令がありました。

司会 シベリア出兵ですね。

小野 ええ、シベリアまで送られました。真鍮の小判みたいな認識票をもらつて、それを肌につかりとつけて出発しました。それから一年ちよつとシベリアにいました。

司会 戦闘は激しかったでしょう。一緒に行かれた方で戦死された人もいますでしょう。

小野 戦死はどうか知らないが、戦病死はありました。なにしろシベリアは寒冷地です



小野近之助

から、みんな凍傷にかかっちゃうんです。

司会 それは大変だったですね。ところで、お宅が簀立てを始められたのは、いつごろですか。

小野 シベリアから帰ってからはしばらく手繰りで漁をしていました。一〇年ぐらいやったかな。それから仲間ができて、秋元糸吉さんが親方株で簀立てをやらないかということが始めたわけです。当時、簀立ての仲間は六人ぐらいいいましたが、よく魚が入って、いい稼ぎになりましたよ。

司会 どのくらいとれたんですか。

小野 多いときで一〇〇樽。大部分はイナで、木更津市場だけでは捌けなくて、千葉まで送ったこともある。

司会 ほくほくものだったというわけですね。

小野 まあね。そのときはよかったけれど、大漁は一、二年で、あとは余りよくなかったな。

広部 一番初めは漁師仲間で作っただよ。毎日、二人ずつ交代で魚をあげに行くんだ。

ところが、その魚を自宅に持って行って食っちゃう者もあるんだ。だからソロバンが合わないんだ(笑)。それでわれわれは途中でやめてしまって、小野さんたちが残った。

伏居 六人残ったね。

司会 当時、朝、簀立ての魚を売りに来ていたね。私たちもよくそれを買って食べた。

小野 ええ、地元でも売っていたが、大部分は木更津に送っていた。自転車に積んでね。多いときは二台で行った。



簀立て漁師仲間(昭和9年頃)

明治四十三年の大災害

司会 簀立ての話はそれぐらいにして、坂井武次さん。お宅の屋敷はその昔、溜池になっていたという話ですが……。

坂井 そうです。昔は溜池になっていて、一ノ坪あたりの田の用水に使われた。明治四十三年の山崩れのときに全部埋まっちゃったんです。それで、礧貝さんのご厄介になって、土を出して、今の地盤を作ったと聞いています。

礧貝 若鍋晃之助さんの上の山が落ちたんですよ。

小野 あのときの被害はひどかった。あそこらへんはほとんど埋まっちゃって家がつぶれた。私の家も全壊だった。

伏居 私のところは半壊だった。平野與吉さんの家もかなりの被害だった。油屋（広部邦夫家）もひどかったね。

広部 伝左（広部一郎家）もやられた。

安藤喜一郎（家号「仁兵衛」）うちでは納戸へ大きなけやきが飛び込んで来た。だんご屋（牧野巳之吉家）も全壊です。

こんな話もあるんですよ。ある人が海の近くに倉庫があったので、見に行く途中、子供の泣き声が聞こえた。あわてて掘ってみたら、母と子供が生き埋めになっていた。子供だけは助かったが、母親は死んでいました。

諏訪 お寺もやられたんです。本堂がね。改築するときに、柱がどれくらい折れているか調べてみたら、二一本か二二本だった。

司会 その時は何日ぐらい雨が降ったのですか。

広瀬 七日七晩だそうです。

伏居 いや、一一日間降ったよ。

広瀬 あの時は私が四つのときで、座敷で遊んでいて手を脱臼したんだそうです。その時分、近くに医者がなかったのので、青堀の医者までおやしおつかあか、どっちかにおぶさって行った。えらい雨だった。道が川みたいになって水が流れていたのを覚えてい

司会 大正六年の災害のときはどうでした。

小野 あときは風が強かった。それで津波が来て、海岸では舟が全滅だった。

坂井 手繰舟が秋元忠治さんの家の下まで流れてきた。

安藤 一六号線まで海水があがって、腰ぐらいまであつたそうです。

平野興志雄 昭和四十九年の災害もひどかったね。初津新蔵さんのお宅が全壊。それから、長福寺のがけ崩れ、伏居さんの裏と小野さんの裏の山崩れ。秋元晋さんの裏の山崩れ、広部勇さんの旧宅が中破、坂井伊之松さん宅が小破、牧野其一さん方炊事場が小破です。床上海水が二〇〜三〇軒、がけ崩れが一四〜一五軒ありました。

長福寺にあった高等科

司会 ところで磯貝さん。江戸中期の文書を見ると、坂田の山にはイノシシやシカがたぐさんいて、作物に害を与えたというのですが、あなたが若いころはどうでしたか。

磯貝 イノシシはいませんでした。シカはいました。板取の開墾地に一頭いたけれど、

どうも鹿野山のほうからまぐれてきたものらしい。

司会 キツネはたくさんいましたね。

磯貝 たくさんおった。うちの裏の畑などには年中足跡があった。うちの隣でニワトリをたくさん飼っていたから、それを取りにくるんですよ。

キツネといえば、私自身、キツネに化かされたことがある。

広部 本当ですか。それで、どんな風に化かされたんですか。

磯貝 私が青年団に入って間もないころだから、大正の初めごろですね。私は久保に用事があった、夕方家を出たんです。したら、今の駅前の小売市場のあたり、あそこは昔、溜池があつて、その傍に弁天様が祭つてあつたように記憶しているが、そこでキツネに会つてしまった。久保へ行くつもりだったのが、中野の孫右エ門（家号「長屋」）さんのほうへ行つてしまつたんです。

司会 何か持っていましたか。

坂井 豆腐屋があつたから、油揚げでも持っていたんだろう（笑）。

司会 話はちよつと飛びますけれど、磯貝さんは長福寺にあつた高等科で学んだわけですね。

磯貝 ええ。あの時分は、中野の学校で尋常科をやつて、坂田の長福寺が高等科で本校でした。高等科には、青堀や畑沢からも通つて来ていましたよ。明治三十年ごろのことですね。

広部 あの時分は、一年、二年が一緒で、二〇人ちよつとでした。高等科は、この付近では飯野と坂田にしかなかつた。

司会 長福寺の高等科というのは、いつごろまであったんですか。

磯貝 中野に高等科ができるまで続いていたね。榎本先生という校長がいたな。

広部 有名な先生だった。あの人が教えた坂田の高等科の生徒は、軍へ入ってもみな成績がよくて、上等兵になった。そのために、あの先生は評判だった。

磯貝 軍隊方面には熱心だったね。巡回に来た衛兵に対して、服装が乱れていると生徒のほうが注意をしたとか、そんな話もあった。

司会 地藏堂墓地の中に「其一先生墓」という大きな石碑がありますね。この方も「其一塾」とか何とか、教育方面で功績のあった方だといわれていますが……。

色部金治（家号「勘ざえむ新宅」）塾のことは知りませんが、あれはお墓です。いま、同姓同名の牧野其一という人がいますが、その人の話では、昔、うちには其一という非常に偉い先生がいて、その人にあやかれということ、同じ名前をもらったということ、なんです。なんでも、花の井の東側あたりで塾を開いていたと伝えられています。

司会 なんの塾をやったのでしょうか。

色部 具体的になにをやられた先生かは知らないが、とにかく偉い人だったということ、です。

湾内烏繩取締役の「武兵衛」

司会 坂井武次さんは昔鉄道におられましたか、鉄道に入られたのは何年ごろですか。

坂井 大正九年です。一六歳で入りました。日給は五五銭でしたが、一〇割増しで一円一〇銭が初任給でした。

司会 お宅が海苔の組合に加盟されたのは何年ごろですか。

坂井 大正六年です。その年の大津波のあとで、父親が舟を借りて始めました。その前は手繰舟で魚を採っていたということです。

司会 古文書によると、坂井さんの先祖は東京湾の鳥、これはカモだと思おうのですが、その捕獲の係をやっていたというのですが……。

坂井 ええ昔々の話ですが、私も親から口伝えて聞いています。

それは、徳川十一代将軍家斉公だと考えられるのですが、江戸へ下ったときに、船で東京湾を通ったそうです。そのとき、赤児の泣き声のような声がしきりに聞こえた。それで、お供をしていた旗本の小笠原の殿様に「あれは何だ」とおたずねになった。小笠原の殿様が「ドウゼン鳥です」と答えると、將軍は、それをつかまえて献上しろと命令したのですね。それで小笠原の殿様は知行地である村の大庄屋であった坂田の坂井四郎兵衛のところはその命令を伝えたくわいです。そして、それが庄屋から私どもの先祖に伝えられ、その鳥をとらえて献上したということです。

司会 ドウゼン鳥とは、カモのことですか。

坂井 ええ、カモよりも少し大きく、よく似た鳥です。食べてもまずく、食っても食わなくても同然だということから、ドウゼン鳥と名付けられたそうです。

それから、お墨付もあった。あけると目がつぶれると言いつけられた箱があった。家宝として代々伝えられていた。私は、父親が死んでから開けてみたんです。そしたら、虫が食っていて、中味はまったくわからなかった。ただ口伝えによれば、湾内鳥縄取締役という役を名主からもらった、そのお墨付だということです。鳥縄というのは、茅の



坂井 武次

■海鳥殺生の免許を与えられた旗本小笠原家
旗本小笠原家は、信元が富津に移ったのち、知行のほか、特に上総、下総、武蔵三国の内海において海鳥殺生の免許を与えられ、湾内の自由航行の特権を許された。

穂をなつて、それに鳥モチをつけて海に流すんです。そうすると、鳥が来てそれをくわえる。そして捕獲するわけですが、その当時は東京湾にたくさん鳥がいたそうですね。うちでは、押送船おしやくりという船を三ばいもつていて、東京湾の鳥の取締りをしていたということです。

司会 いつごろまでやっていたのでしょうかね。

坂井 私のおじいさんの武平の親の代までやっていたそうです。武平という人は、子供のときから麻裏ぞうりに羽織を着てぜいたくに育ったそうですが、明治維新になつても自分では何も商売ができず、家がだんだんすたれたという話です。

司会 麻裏ぞうりはなかなか履けなかつたわけでしょう。

坂井 麻裏ぞうりに羽織を着るとするのは、一般の人にはとてもできなかったそうです。

司会 五大力船というのは坂田にもあったのですか。

色部 ありましたよ。

平野 割合最近までやっていたように思います。

坂田へ落ちた武士「九兵衛」

司会 秋元さん。あなたのご先祖は由緒ある武家の出だとのことですが……。

秋元忠治（家号「九兵衛」） ええ。私の家にも開けると目がつぶれるという行李がありまして、代々伝えられているんです。私の親の代に、秋元猪次郎さんと私をまぜて、初めて開けてみたんです。そしたら、延ばすと四間もあろうかという系図がぐるぐると巻いてあった。大分いたんでいたので、修復したんです。

■押送船

君津地方では漁業のさかんなところで、昔はここで獲れた魚類をオシヨクリ船（押送船）という和船で櫓や帆を使って送り込んだ。そのときに船の上でうたった唄

へ船も早かる 帆なりもよかる

江戸で魚も 値もよかる

ヨンヤ返して アラひと走り

司会 どんなものですか。概略だけでもお話しください。

秋元 系図の始まりは、京都にいたことになっている。京都で欽明天皇のおじに当たる多治彦王基房という公家のところに仕えていて、中山姓を名乗っていた。その後、武家になって、青木姓を名乗った。ところが、なかなか子供ができなくて、加持の浅間様に菊一文字の刀をあげたら一子を設けたとあります。

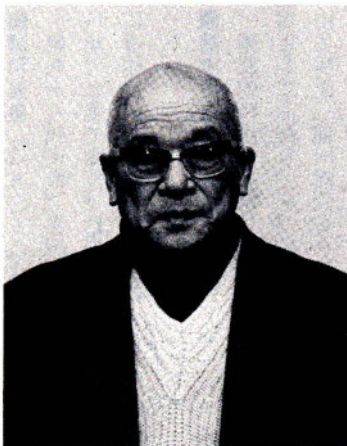
そのころ、青木は安宅九郎景盛の輩下だったので、この安宅氏と源氏がケンカして戦さをはじめた。なんでもお勝という女性をめぐる戦さだったようです。

司会 女性をめぐるトラブル？

秋元 そうです。お勝は安宅氏の許嫁だったのに、源氏がそれを横取りしようとした。それで、うちのほうは七〇〇〜八〇〇騎、源氏のほうは一四〇〇騎が集まって、川越付近で大戦さになった。多勢に無勢で、安宅氏が敗北し、安宅九郎景盛を含め大将株が三名、腹を切って討ち死した。青木も大将株の一人だったのですが、安宅九郎景盛には乳飲み子が一人いて、私どもの先祖の青木だけはその子に乳母と何人かの付け人をつけて、この坂田へ逃げてきたということです。そして、見つかったら殺されるというわけで、ここでまたまた秋元姓と変え、以後それを名乗ったということです。

司会 それが秋元家の先祖ですね。系図以外に何かほかのものはありませんでしたか。

秋元 その系図といっしょに入っていたのが、戦法と陣地の敷き方、葵の紋の半分切り、長い旗の寸法、横幕の寸法などを書いたもの、それに城の図が入っていました。昔、城をすっかり見られたら戦さは負けですから、それで開けると目がつぶれると言ったんじゃないかと思えます。



秋元 忠治

■欽明天皇（五一〇〜五七〇）
第二十九代天皇。継体天皇の第三皇子。五三九年即位。治世中、崇仏の是非をめぐる蘇我、物部両氏が対立、対外的には任那の日本府の滅亡などがあった。

広部 初津さんの稲荷様を知っていますか。あれも目がつぶれるとか……。

司会 あれは私も見せてもらいました。なんでも、小笠原の祖先、祖先といっても一番最初の先祖ではなくて、家康のころの中興の祖に小笠原左衛門佐重広という人がいるんです。その後、江戸中期になって、小笠原伊豆守という人が出て、大阪の堺奉行になった。その伊豆守の任官辞令が中に入っていました。それから、藤井さんの家から小笠原に嫁にいった浄恵という人と信賢の先夫人月暁日女霊神の四人をあそこに祭ったのです。大名なら神社に祀られるが、二五〇〇石の旗本だったので、稲荷様ということで祖霊を祀ったのです。

秋元 なんでも清和天皇の次男とか三男とか書いてある紙が入っているそうだよ。

広部 楠木正行の首を取ったとか何とかという話もあるそうだね。

司会 どうもそのへんは、あまりあてになりませんね。ちょっと信びよう性がない。

大菩薩を祭った妙見様

司会 広瀬さん。お宅にも秘蔵のものがあると聞きましたが……。

広瀬 ええ。やっぱり開けると目がつぶれるという……。ところが、うちの親父は村でも三羽ガラスといわれた暴れ者だったけれど、やはり恐かったのでしょうかね。神主の宮崎のおじいさんに頼んで、半日おがんでから開けてみたそうです。そうしたら、天正十九年（一五九二年）の年号のある書きものが出てきた。これがそうです。（古い木箱を取り出し、その中には証文のような古文書が入っている）。

司会 これは、どこかで何かを拾って妙見様に届けたという内容ですね。

■清和天皇（八五〇～八八〇）

第五十六代天皇。文徳天皇の第四皇子。八五八年、九歳で即位。幼少のため、外祖父太政大臣藤原良房が政務を摂行した。八七六年退位。

■楠木正行（？～一三四八）

南北朝時代の武将。正成の長男。南朝方の武将として活躍し、一三四七年（正平二年）には山名時氏、細川頼氏らを摂津南部で破る。一三四八年、高師直、師泰兄弟と河内四条畷で戦い戦死。

小野 妙見様のご本体を拾って、妙見様に祭ったということだよ。

諏訪 私の聞いたところでは、こういう話だよ。これは青蓮寺のお坊さんが長福寺の下の地藏堂に来たときに、広瀬さんの先祖が拾ってきたものを見て、仏様が神様かわからないから調べてみようといって持って帰った。そして、どうも妙見さんらしいからといって妙見様にあげたというんだ。広瀬さんの先祖の人が拾ってきたのを差し出したので、妙見様から広瀬さんのうちに預り状のようなものを一札入れたというんだね。

妙見様はもともと仏様ですからね。なんでも、平忠頼という人が一〇一〇年から一〇二〇年の間に青蓮寺へ妙見を祭ったわけです。広瀬さんの家は坂田志毛部でも大変な旧家で、妙見様を非常に信じていたようです。

広瀬 うちの言い伝えでは、青蓮寺のお坊さんが家に来て、うちの馬に乗っていったという事です。

司会 広瀬さんのお宅では、今でも妙見様にお餅をお供えしているそうですが……。

広瀬 ええ、お祭りの日に毎年あげています。いつのころからかはわかりませんが……。

諏訪 おそらくその一札をもらってからではないかな。とすると、四〇〇年以上続けているわけだ。

広瀬 さつき毎年あげているといったけど、私があるようになってから二回だけ遠慮しました。親父が死んだときと、ばあさまが死んだときです。

司会 妙見様は今人見神社になっていますが、もともとは何だったのですか。妙見大菩薩だったのか、それとも妙見神社だったのですか。

諏訪 あれは妙見神社じゃない、大菩薩が本当です。



広瀬 潔

もともとは、平良文という人を、その子の忠頼が祭ったものです。それで、青蓮寺が妙見の別当なんで、坂田の長福寺も平忠頼の系統が建てたものです。

それが、天正時代にお寺が焼き払われた。そのときは坂田も全部焼き払われたらしい。供僧免くそうめんという小字がありますが、あれはもともと長福寺のものでしたのですが、そういうことがあってお寺から離れて皆さんの耕作地になったわけです。

それはともかく、妙見様は平良文を祭った大菩薩だった。それが、明治政府になって、神仏混淆まかりならぬということになったものだから、人見神社から妙見大菩薩を取り去って、青蓮寺に祀ったんだ。青蓮寺は妙見の別当なんです。

盛んだった青年の剣道熱

司会 伏居さんのお宅は士族だったわけですね。この前、元祿ころの立派な位牌をたくさん見せていただきましたが、たしか剣道の達人がおられたとか……。

伏居 私の祖父の新次郎が剣道の達人で、東京に道場をもっていて、浅草の小天狗とか言われていたそうです。

司会 それから馬吉さんという方がおられて、医者だったといえますね。

伏居 新次郎の前の人ですね。伏居次郎悦孝という人が医者をしていたと聞いています。幕末のころでしょうね。江戸時代は本姓を「藤井」といったそうですが、やっぱり田舎へ来て百姓になれば百姓の名前にならなければいけないというので、馬吉と名乗り、姓も「伏居」としたという。初津が殿様で、私のところはその下っ端ですからね。

司会 剣道といえば、昔は剣道が盛んだったですね。安藤さん、あなたは剣道七段で、

■青蓮寺

人見山青蓮寺の寺伝によれば、本寺は山城国醍醐報恩院の末派であり、天文中（一五三二―一五五四年）兵火にかかり旧記などごとく烏有に帰したので、開基年月日、由緒など詳かではない。天文七年は北条氏綱、氏泰父子が里見義堯を下総に破り、小弓公方・足利義明を殺した第一次国府台合戦の時代だ。



伏居岩吉

坂田の剣道の指導者だったわけですが、剣道を始めたころのお話をお聞かせ下さい。

安藤 大正五、六年のころだったと思います。安藤正作さんが区長をやっていたころ、若い衆が夜遊びをしたり、若い娘と遊んでばかりいる。これではいかんということで、撃剣をやらせようということになった。それで神門の守嘉七さんを師範にして始めたわけです。大堀の鳥海さんとか、笹塚の川間さんという人なども指導にきました。流派は「不二心流」で、流祖は中山一心斎という人で、分骨が木更津の成就寺に祭られています。私は四代目の襲名式のときに呼ばれて行ったんですが、その四代目というのが成東町殿台の石山佐太郎という人で、この界限はおおかた「不二心流」の系統でした。

司会 当時は青年会というのはあったんですか。

広部 ありました。撃剣のはじめは青年会の仕事だった。

安藤 それから、守嘉七さんの弟子に二間塚の斉藤伊三郎という人がいて、またその弟子の山田嘉吉さんなどが坂田へ代稽古に来ていた。その時分は、まだ電灯がついていなかったもので、庭の四隅にランプをつけてけいこをやった。先生たちは地下たびを履いて通っていたね。自転車だったかどうか忘れたけれど……。

司会 安藤さんのほかに、どんな人たちが剣道をやっていましたか。

安藤 北見浦吉さん、平野秋蔵さん、周准農学校の人たちはみんなやりました。私なんかは、水越清さんに頭をボカボカ叩かれた（笑）。今のよう竹刀の持ち方やら足の運びから教えるのではなく、いきなり面をかぶせてボカボカですからね……。相当意地がなければもたなかったですね。

司会 それで青年の夜遊び防止に効果があったんでしょうか（笑）。



安藤喜一郎

■中山一心斎先生の碑
木更津市南町の成就寺の正門前の向って左側に一心斎先生の碑が建てられている。

安藤 それは効果はありました。たしかなにかの記念写真があったはずだけど……。

剣道といえば面白い話があるんですよ。先ほど名前の出た伏居新次郎さん、浅草の小天狗といわれた人ですけど、なんでも小笠原家の剣道師範をしていたそうです。明治になって、初津さんのところにあった村役場で事務をやっていました。それで、中野に小学校が建てられたとき、その記念に剣道大会が開かれて、伏居さんは貞元の紺屋の三沢さんと当たったそうです。三沢さんは伏居さんとやったんではとてもかなわぬというので、ある人を通じてわたりをつけてもらうように頼んだのですが、その人が伏居さんに告げるのを忘れてしまった。だから、伏居さんは力いっぱいやってしまっ、たて続けに二本とって勝負がついた。そこで向こうが怒って、その後で伏居さんは三沢さんの門弟に闇打ちを食らったというのです。なんでも木刀でなぐられて歯を飛ばされたということですよ。

司会 それから安藤さんは秋の祭礼で「馬出し」の名人でしたね。「馬出し」というのはいつごろ始まって、いつごろまで続いたのですか。

広部 安藤さんのところはお父さんも名人だった。

安藤 私は二十五、六歳のときから始めたから、大正の末ごろかな。うちのじいさんもやっていたというから「馬出し」が始まったのは、江戸の終りか明治の初めだろうと思います。それから終戦後までやっていた。

坂田の「馬出し」で一番盛んなころは七〇何頭出たから、壮観だった。古八幡で御神輿が小休止するんだが、その間にやったんです。若衆二人が馬の両方のたてがみをつかんで、三〇〇メートルから四〇〇メートル、馬と一緒に馳けるんです。耕うん機が出て

きて馬がいなくなつてからとりやめになつたけれど、なかなか勇壮な行事だつたね。

司会 勇壮といえば、一月十二日の浦祭もにぎやかなものだったですね。

秋元聰 (家号「作えむ」) あれは海の男だけの祭礼でしたからね。儀式が終わつて漁業協同組合の事務所引きあげてきて、そこで宴会をやるのです。まったくの無礼講で、近隣の組合長なども招待されるのだけれども、帰るときは、いっちょうらの背広の袖がなくなつていたなど、笑話話絶えなかつたよ。

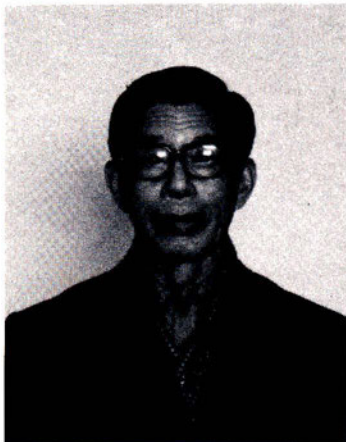
司会 秋元さんがまた先頭に立つてやつたのじゃないですか。

秋元(聰) それは組合長という立場にもあつたし、私が先頭に立つて騒げば正真正銘の無礼講になつたしね。それでもこの浦祭がなければ、やはり味がなかつたらうし、組合員で反対する人は一人もいなかったよ。

司会 安藤さんは手造り花火でも権威者でしたね。

安藤 私の覚えているのでは、日露戦争の戦勝祝賀会でやつたのが始めだつたと思ひます。その当時は宇兵衛(斉藤誠一家)の藤太郎じいさんや井祐平次郎さんなんか盛んにこしらえていた。それを兵えむ(青沢家)の下であげたわけです。花火を上げるときの筒が問題でね。いまの訓練校のところがまだ国有林だつたけれども、その中にいい木があつたんで、それを伐つてきて筒をつくつたのです。それを伐り出すとき、見つかるといけないので、となりの勘ぎえむ(色部家)の地所を遮つて、いつ調べられてもいよいよするなど智慧をしばつた。そして伐り出してから「たが」をいっばいかけて花火をあげたものでした。その筒は八幡様の東側の行井戸(ぎょういど)に埋めてあるはずですよ。

広部 その筒も一〇年も使つたら使えなくなつて、新しいのをこしらえた。ちょうど長



秋元 聰

福寺の上のところにいい木があって、それをぶった伐ってこしらえ直したんだ。

長福寺再建の苦勞

司会 小野さんのご先祖も武士だったと聞いていますが……。伏居さんのご先祖といっしょに坂田に移ってきたそうですね。

小野 よくはわかりません。だけど、太刀は一本ありました。学校から帰ると、それで桜の木などを切ったりしていた。

磯貝 戸籍上は士族だったんでしょ。軍隊手帳に書いてありましたね。

小野 ええ。それには士族と書いてあった。

司会 小野さんは、いまの長福寺を再建するときに、建設委員長をされましたね。

小野 はい。大変苦勞しました。再建費用が足りなくて……。

広部 前のお寺は草ぶきだから、毎年修理をしなければいけない。その修理費用を毎年檀家の人々から調達していたのだが、それがバカにならない。それで何とかしようという事になった。柱の折れたところを取ってコンクリートにしようというわけだ。役場にいた荒井さんにみてもらったら二〇〇万円かかるという。それなら、一度に集めるのは大変だから三年がかりで集めようということになって、委員を立てて寄付金を集め出した。結局、海苔の悪い年があつて一年延ばしたので四年かかったが、目標の二〇〇万円は何とか集まった。そしたら屋根の修理だけじゃなくて、どうせだから新築しようという話になった。四十五年ごろのことです。

お寺の地所が八反ばかりあったので、最初に五反歩、これを三五〇万円で売った。そ

れで寄付金の二〇〇万円とお寺のお金を合わせて約六〇〇万円の金ができた。

司会 新築の費用はどのくらいだったのですか。

小野 見積りでは六二五万円だったが、入札者が二五万まけてくれて六〇〇万円です。でくれることになった。

諏訪 あれは、町役場の荒井建築課長に設計してもらったんだが、六〇〇万円ならば本堂を平らの屋根で鉄筋でやれというから、そのときにやってしまったんです。

伏居 いいときにやったよね。

司会 それで、支払いは全部間に合ったんですか。

小野 まだ屋根もないし、庫裏もない。雨は漏らないが、屋根がないので格好が悪い。

諏訪 そしたら、残りの三反の土地が売れたから、それで屋根と庫裏をやることになった。

司会 浅間様の山ですね。

広部 そうです。庄ざえむのおじいさんが区長をやっていたとき、町でもっていた山を各部落に分けようとした。よそは入札で分けたけれど、坂田では長福寺をやるということでもらった。それをあとで約二〇〇万円で売った。

諏訪 それでも足りなかった。そこで、庫裏は檀家で寄付しようということで、約四〇〇万円集まった。結局、全部で一七〇〇万円余りかかったね。

司会 建設委員長を小野さんがおやりになって、ほかに委員はどなたですか。

小野 伏居さんと平野勲さんと、広瀬皓さん。それから坂井武次さん。

坂井 私が区長をやっていたときに、諏訪さんからぜひやってくれないかと頼まれた。

それで何とかやってみましょうと引き受けたわけです。

最初に考えたのは、世話人をつくろうということで、部落の長老の方々にお願いをして世話人になってもらった。それから建設委員会になったんです。

諏訪 皆様のご協力で立派なお寺を再建できて、有難く思っております。

司会 お寺の話が出たついでに講の話を伺いたいと思います。小野さんのところは御岳講に熱心でしたね。あれはいつごろから行くようになったんですか。

小野 うちの父親の代からです。私に加わったのは三〇歳のころからです。一〇年ぐらい行きました。当時は、木曾福島まで汽車で行き、その後はすべて歩いたものでした。

司会 何日ぐらいかかったんですか。

小野 四日か五日かな。一回で二〇円か三〇円かかったね。御岳講の仲間は、当時坂田で二〇人ぐらいいましたね。御岳講のほかに、当時の坂田には富士講というのもあって、これも盛んだった。

広部 石橋の中富から来た人が御岳山をえらく信仰していて、その人が先達になったという話を聞いたことがある。

司会 そのほかに講といえますと……。

小野 嘉石講というのがあったな。これは講といっても持ち回りで拝むわけだから、お参りということにはなかったけれど。それから、成田講とか、山倉講とかいろいろあった。**司会** 色部さん。いまの秋元晋さんの家の南の山のほうに、昔、滝の前不動というお不動さんがあったそうですが、どのあたりですか。

色部 君津高校へ上がる道路のまん前です。小野さんの店の横ぐらいかな……。あれは

■坂田の講

坂田の講としては、次のようなものがあつた。

①嘉石講（かせきこう） 嘉石様を月番で回る。

（御神体は黄銅鉞のようなもの）

②成田講 掛金をして、一年一回代参で成田山にお参りする。

③鬼神講 東京・大森鈴ヶ森の鬼神様にお参りする。

④子安講（安産講）主婦達の集りで、毎月一回、慈母観音の祭で飲み食いする。

⑤男庚講 かのえさるの日におがむ。

⑥女庚講 さらだ彦の神

⑦百まん講 老婆さん達の念仏。毎月一回じゅずを回す。

⑧十四日念仏 老婆さん達の念仏、月一回。

⑨山倉講 香取郡山田町山倉にある。

⑩半僧坊大権現 鎌倉にある。坂田では戦時中に自然消滅。

⑪富士講 掛金をして、代参にて年一回富士登山する。

⑫御岳講 掛金をして、代参にて年一回御岳山に参拝する。

漁の神様だということ。私が祖父から聞いた話では、昔、本間某という非常に漁の上手な人がいて、大漁ばかりしていた。それで滝の前というところに祭ったそうですが、一時は房州方面からお参りにきたそうです。

それで、これは後の話ですが、あそこを開発するとき、いまの本間君が、あのあたりに金の兜が埋まっているはずだ、掘り起こして折半しようということで、私はあそこへ三日間通った。それで専門の業者を呼んで掘ってみたんですが、ここは盛り土ではないから出ないだろうという。結局、ブルドーザーでどんどん崩してみたわけだけど、何も出なかった。そして、その前に、神主の刑部(宮崎)さんがその地藏様を本間さんの裏に移したわけです。

司会 学校造成のとき、あの辺に貝塚とか古墳とかが出たということですが……。

色部 当時、私は毎日のように山にはいっていたのですが、古墳はなかったね。ただ、訓練校の山からはたくさん貝が出た。一カ所だけというのではなく、あっちからもこっちからもといったぐあいに……。私はたしか三十何個か拾い集めて、市の教育委員会にもっていったよ。

司会 それは海底の貝ですか。

色部 そうです。食べて捨てたものではなく、海底で生存していたものです。直径十五〜二十センチぐらいの丸形の大きいやつです。

司会 ナウマン象の骨も出ましたね。これは字鵬げんぼ口の山の中段から発見され、木更津の上総博物館にあるということです。

■ナウマン象については第一編第一章に掲載したとおり。その後、臼齒の化石が発見されていることが、判明した。

薬師堂と古八幡の由来

司会 安藤さんにお聞きしたいのですが、薬師堂と古八幡ですが、あれはどういうものだったのですか。

安藤 薬師堂は覚えていますが。かなり大きな建物でした。五間半の五間ぐらいはあったかな。草ぶきだったか、かやぶきだったかは忘れたけれど、大分古くなっていて、家が傾いていた。

磯貝 草ぶきだった。

安藤 うちのすぐ裏にあって、五段か六段の石段がありました。今はなくなってしまったのですが……。あそこは若い衆のたまり場でした。よく若い衆が集まってバクチをやったといわれています。

司会 あそこには墓石が四つあって、その一つにかすれて読みにくくなっているが、たしか「延宝××年」と刻んであるんですね。

安藤 なんでも、昔、旅から旅へ渡り歩いている人がいて、薬師堂に泊っていて、そこで亡くなった。それで、私のところと半九郎（安藤史郎家）が葬ったそうです。いまでも半九郎がお墓の掃除をして、私のところでお花をあげたりしています。

司会 薬師堂というのはいつごろまであったんですか。

諏訪 お寺の記録では、明治四十四年六月十日にお寺に移したとあるから、その時まででしょう。

磯貝 私らもよく遊びに行ったが、立派なものだったよ。もう人はいなかったが、建物

1間 = 6尺 = 1.82m
1坪 = 3.3m² = 6尺四方

だけ残っていた。

司会 薬師堂はそれぐらいにして、古八幡はどうだったんですか。古地図によると、安藤さんの旧宅の裏山に古八幡の境内があったようなのですが……。

安藤 奥行き一間ぐらいのお宮が立っていましたね。表は九尺ぐらいだったかな。薬師堂の右上に一五、六段の石段があつて、それをあがつたところに小さな狛犬が二つ置かれてあつた。お宮の中には、たしか帝釈天が祭られてあつた。亡くなった半九郎のおじいさんとよく隠れんぼをして遊んだものです。八幡様と合祀するとき、田端のおじいさんがご神体を大事に抱いていったのを記憶しています。

司会 それから、八幡神社境内の御神輿庫の裏に二つの小祠がありましたね。昭和五十四年の台風二〇号で吹き飛ばされたんですが、その一つは牛頭天王、もう一つは古八幡から移されたもののようなのです。その中を調べたのですが、明治二十三年二月建立再興と書いてあつた。世話人が青沢吉弥、苺込兼治郎、安藤仁平、安藤半九郎となっている。**諏訪** その牛頭天王というのは、兵えむ（青沢家）が、戦国時代が終わって坂田に落ち着いたときに、祭つたということです。兵えむは戦国でどこから流れて来たんだけれども、相当カネを持っていたらしい。寺家坂の墓地には、慶長のころ（一五九六―一六一九）の墓もあるんですよ。名主をやったりして、なかなかの家柄のようですよ。おそらく、戦国の時代に相当の人物が戦死して、それを祀つたものと思われます。

機械化に積極だった男たち

司会 話は変わりますが、坂田の文明開花とも申しますか、近代化について話してい



八幡神社境内の「力石」

ただきたいと思えます。鉄道が通ったのは大正四年ということですが、電灯が通じたのは何年ごろでしょう。

坂井 私が兵隊に行くので鉄道をやめた日の晩だから、大正十二年十二月二十六日です。坂田に一斉につきました。

司会 水道はいつですか。

安藤 昭和三十三年です。私が区長をしていて、斉藤優さんとか平野隆さんが補佐をしていたときに水道を引きました。水道建設委員長は安藤悟さんでした。

水道を引くときはちょっと問題が起ってね。周西小学校のところまですでに水道がきていたんですが、大和田地区が坂田が引かないなら自分たちが分水すると言い出した。私はこれはいかんと思って、早速会議を開いて、水道の希望者を募ったのです。ところが希望者は二八戸。これじゃどうにもならない。その前に部落総会で一年ごとに各組に一カ所、消防用の貯水池をつくることになっていたので、二八戸プラス消火栓ということとで決議したわけです。その時の水道引料が一戸当たり一万五〇〇〇円、最低が五〇〇〇円だった。水道に入会する場合は入会金として五〇〇〇円を納め、それを積み立てて工事に充てました。工事開始が三十二年で、完成したのが三十三年三月だった。

司会 農業の機械化でも坂田は早かったですね。色部さんはその先駆者だといわれているんですが……。なにしろオートバイに乗ったのはあなたが一番早い。

色部 ええ。アメリカから輸入したのが木更津の自転車屋にあった。こわれていたのを自分で組み立てて乗ったんです。戦争前だった。戦時中は油がなくて乗れなかったからね。もちろん無免許です。

司会 発動機を使ったのもあなたが最初といわれていますが。

色部 ええ。発動機は良栄社からもってきた。あれは大正時代に輸入したもので、ダブル農発といわれたものです。

司会 メリーテラー（耕うん機）もお宅が最初だということですね……。

色部 はい。あれは昭和二十九年だったと思います。最初は飯野の金箱さんが買って、その次に大和田で一〇台、坂田で六台入った。その後、三十年代に入ってから坂田もだいぶ農業景気がよくなって、全部で六〇台ぐらい入ったんじゃないかな。

司会 消防の機械化も早かったですね。

色部 昭和三年にポンプを機械化したからね。その前に明石醬油で大正十五年にガソリンポンプを入れて、これはいいということでの直後に入れたんです。

司会 それまでは手押しですね。

広部 そうです。神門のタガヤ旅館が焼けたとき、手押しをもっていったんだ。ところが水が出ない。それで新しいのを買おうということになって、私と石橋（牧野小一郎）が機械を習って二台入れたんだ。

司会 秋元さんのお宅では乳牛を飼っていましたね。

秋元 終戦直後に飼いはじめて、多いときは四頭いました。一〇年ぐらい飼ったかな。

太平洋戦争と坂田の人々

司会 戦争中の空襲ですが、坂田はどうだったんですか。

色部 空襲といっても爆弾が落ちたわけではない。機銃掃射ですね。田代屋新宅さんと



色部 金治

平野治二さん、それにお寺の下がやられた。

坂井 私のところも竹やぶに弾が当たって、その弾をとってあります。

色部 平野さんのところはおばあさんだけしかいなくて、曳光弾で火がついて、ぼうぼう燃えていた。齊藤優さんのおじいさんが飛んでいって、もみ消したんです。このとき高坂の官舎もやられたし、その上の山もやられた。あれは二十年の三月だった。

坂井 周西駅（君津駅）がやられたとき、一つの障子に弾が六〇発ぐらい当たっていた。私はその下にいたのだが、ストーブの煙突が落ちて、女の職員が泣き出すやら何やらで大変だった。

司会 牧野さん。あなたは軍隊の関係でこちらへ来られて、結局、奥さんをもらって坂田に居坐ってしまったわけですが……（笑）。坂田へ来られたのはどういう関係だったのですか。

牧野 私は茨城の生まれですが、こうしていまは坂田のお世話になっている次第です。

私は、昭和十九年に館山工学兵器学校に在職していました。戦争がますます激しくなるに従って、軍の命令で学校を疎開するということになり、千葉県の中であちこち適当なところを探して回りました。たまたま八重原航空廠の中に森暁さんが経営していた日本光学という会社があって、私どもとも関係があったものですから、その実地教育を兼ねて君津町を訪れ、町長さんにお会いして疎開のことをお願いしたわけです。そうしたら、当時、坂田の区長をされておられた秋元猪次郎さんのご配慮で、元の周西村の役場が空いていたので、そこを使ったらよからうということで、こちらにお世話になることになったわけです。それで、十九年十一月二十日、私の部隊の学生一〇名を引き連れ



牧野小一郎

て、こちらに疎開し、最初は長福寺を根拠にして、校舎ができるまで皆さんのお世話になりました。

坂田で生活してみて、とにかくこの土地は海あり、山あり、そして広い田畑に恵まれ、本当に静かな、豊かな村落であると感じました。本当に自然に恵まれた豊かなところで、私もここに居つくことになったわけです（笑）。

司会 戦後は海苔採りなんかもなさったのですか。

牧野 終戦後、二十二年二月に再びここへやってきました。それで、慣れない農業と海苔採りを教えていただきました。

司会 戦後の供出米では、みなさん大変なご苦勞をされましたね。マッカーサー指令とかがあって……。

伏居 昭和二十三年にマッカーサー指令が出て、供出が非常に嚴重になった。私はその時、実行組合長をしていて割り当ての配分に当たったんだけど、自分の飯米を割いてでも供出せよという嚴重なものでした。それで、割り当て分を供出すると、自分のところで食う米がなくなってしまうというひどい家もあった。それでもマッカーサー命令だから出さなくてはいけない。一応供出してもらって、すぐ役場に行つて供出と互い違いの形をとって飯米を申し出て、その家に届けたということもありました。

平野 私はその時、食糧調整委員として供出米の割り当てをする立場にあったのですが、坂田の方々はみなよく協力してくれました。まだ戦争が終わったばかりで、ご主人が出征したまままだ帰つてこれられない方もおられた。みなさんにも大変お骨折りいただいて、何とかかんとか坂田はやり抜いて、割り当ての供出を達成したわけです。あの時は本当



平野興吉

■平野興吉

平野興吉氏は、戦後、町会議員、耕地整理組合、清算人などをつとめ、坂田の発展に努力された長老の一人である。本座談会には交通事故のため出席できなかったため、ここに写真を掲載させていただいた。

に頭が下がりました。

伏居 あの時は、一晚徹夜で話し合ったことがあったね。供出米の割り当てについて話しあったけれど結論が出なくて、部落の主だった人が残って、事務所まで夜明かしをした。
司会 いろいろ苦しいことがあったんですね。そうした苦勞をともにしてきたことが、漁業権の放棄や土地区画整理事業を推進するにあたっての力となっていったともいえませんね。

新生坂田へかける覚悟

司会 君津に八幡製鉄が来ることになって漁業権を放棄し、坂田も大きな転換期を迎えることになったわけですが。平野さん、あなたはその直前の三十二、三年ごろ漁業組合長をしておられたのですが、そのころの海苔はどうだったのですか。

平野 当時は、海苔は一〇〇円前後だった。一〇枚だね。良いもので一三〇円、安いもので七〇円ぐらいですね。当時は必ずしも豊作という状況ではなかったけれど、坂田は皆さん研究熱心で、平均点以下ということは余りなかったですね。だから坂田漁協は非常にいい組合だと世間も見えていたし、われわれもそう信じていたので、海苔養殖に対する執着も強かった。

司会 貝類も盛んだったでしょう。

平野 ええ。貝類もやっていました。ハマグリとかアサリとかね。それも組合直営でやっていますから、皆さんの収入もよかったですね。

最近思うのですが、いま海苔や貝類の値段が非常に良くなっていますね。だから、現

在もし海苔や貝類をやっていたら、たしかに骨は折れるけれども、収入としたらえらい収入を得ていると思うのです。貝類だけでもちよっと計算できないような大変な収入だと思えます。それが、新日鉄が進出したことによって、身体はたしかに楽になり、文化的生活ができるようにはなっただけでも、財産としてみると、財産は日一日と減っているような気がしてなりません。市全体はたしかに発展していくでしょうが、坂田自体としてみると、一日まじに減っていくように思えてなりません。

秋元(聰) たしかに、いま海苔や貝類をやっていたら大変な収入になったでしょうね。

司会 漁業権を放棄する前、坂田では独自の埋立て事業をやりましたね。あれはどんないきさつだったのですか。

秋元聰 坂田は漁業権の放棄には最後まで反対していた。だけど、君津漁協が漁業権を放棄して囲りの海は埋め立てられる。それに東京湾の汚染も加わって、海苔養殖の将来も暗たんたるものになってきた。それで、いずれは放棄せざるを得ない状況になってきたのです。

そこで、どうせ埋め立てられてしまうものなら自分たちで埋め立てようということになったわけです。荻込寅藏さんの北側から畑沢との境まで、約一万坪を埋め立て造成したのです。坂田の漁業組合は、種付網の他漁協への出荷といった特異な財源があったからできたのですが、他の漁協はびっくりしたらしいですよ。海面のまま譲渡するのと埋め立て後に売却するのでは、その評価はおのずとちがいますからね。結局、一万坪埋め立てて、坪一円で売却したから、まあほどほどに利益が出て、組合員たちは喜んだものです。

司会 やはり秋元さんの才覚がものをいったのでしよう。

秋元(聰) 今から見ればそうかも知れませんが、当時はせっぱつまった気持でした。海苔養殖しか知らないわれわれが、漁業権を放棄してしまったらどうなるのか、陸にあがったカッパみたいなものですからね……。

まあ、われわれは新日鉄が来るというので、いわばお国のために漁業権を放棄したわけだ。そしていま、土地区画整理事業を行ない、新生坂田にかけているわけです。いまや坂田は君津の坂田だけではなく、日本の坂田、いや世界の坂田になろうとしているといってもいい。

司会 何しろ新日鉄は世界最大の製鉄所ですからね。そうした新しいものを、古い伝統というか、先輩たちの築いてきた遺産とが、どう調和を保って、豊かな坂田を守りつづけることができるかどうかそれは、土地区画整理事業の成否に、そしてわれわれの双肩にかかっているともいえるわけですね。

本日は、日曜日にもかかわらず、長い間、本当にありがとうございました。われわれの知らない貴重なお話をいろいろ伺うことができて、大変感謝いたしております。どうかこれからも健康にご留意されまして、坂田のためにご活躍いただくことをお願い申し上げます。終りのあいさつとさせていただきますと思います。